
巻 頭 言

皆 さん の 出 番 で す

院長 平岡 眞寛

今年も日本赤十字社和歌山医療センター医学雑誌（以下当誌）をお届けします。

創刊された1983年当時は和歌山赤十字病院医学雑誌の名称で、オリジナル（原著）のみを受け付け、しかも国内のみならず海外までも配布していたという、一流の学術雑誌を目指し、またその役割を一部は示していた。凄い雑誌である。しかしながら、その後は数多くある医学系学会が求心力のある学会雑誌を刊行するようになった。また、インパクトファクター志向が強くなる中で、欧米のいわゆる一流雑誌に投稿し採択されることが優先されるようになり、学術雑誌としての当誌の存在感は弱まって行ったと思う。その一方で、日常的な医療の中で発見したこと、長年の経験から学んだことを記録に残し、その貴重な情報を共有することの重要性は高まってきた。また、医学がどんどん専門分化している中で、最新の情報を他領域の医師、医療専門職が理解しておくことはチーム医療を実践する上で益々大切となっている。今回の当誌では、医療者として知っておくべき最近の進歩について判りやすい総説2編、当センターでの得られた、あるいは当センターならではの貴重な原著6編と活動報告が掲載されている。まさに時代に即応した、当センターの活動に合わせた医学雑誌に展開していると言えよう。

さて、昨年当誌の巻頭言では、学術文化活動の強化を打ち出し、その具体策として、職員それぞれが自ら尽力すべきことと、病院として対応しなければならないことの二つに分けて述べた。病院が計画中心としていたもののその後の進捗状況を示したい。

まず、文科省の科研費を申請できる機関への資格取得である。昨年9月に見事承認され、当センターから10件の申請がなされた。採択率は低い上に大学病院に有利な科研費であり、当センターから採択されるか不安ではある。いずれにしても科研費申請資格の獲得は大きな一歩であり、総務課並びに関係者の尽力に感謝したい。

研究活動の活性化として、治験費用をもっと使いやすくすることで臨床治験への関心を高めることを検討中と述べた。こちら検討ワーキングの答申を基に、この4月から経費使用の弾力化が実施される。

検討中であった京都大学大学院医学研究科・社会医学専攻における臨床研究・研究者養成プログラム（Clip）への参画を決定した。院内公募を行ったところ想定以上の希望者に大変心強く感じた。選考委員会により10名が選ばれEラーニングを中心にハードな講習を受けている。全員が1年間のコースを完了すること願っている。このプログラムは継続予定であり、引き続き協力をお願いしたい。

こう見てくると病院としての対応はこの1年間順調に進み、責任はほぼ果たしたと言っても良い。次は、「職員それぞれが自ら尽力すべきことと」の実践であろう。そのコアの部分が学会発表、その先にある論文発表である。日本赤十字社和歌山医療センター医学雑誌がその役割の一端を担うことを期待する。

皆さんの出番である。

